

尖閣問題で武力紛争が起こったら石垣島はどうなるか

2015年9月14日 FBに投稿 石垣市新川在住 笹尾哲夫

最近「自衛隊は尖閣紛争をどう戦うか」(西村金一、岩切成夫、末次富美雄 共著、祥伝社新書、2014年刊)という本を読みました。西村さんは元防衛省・自衛隊情報分析官、岩切さんは元航空自衛隊航空総隊幕僚長、末次さんは元海上自衛隊護衛隊司令という、自衛隊の幹部を務めた軍事の専門家です。

尖閣諸島をめぐる起こり得る武力紛争について、このベテランたちが、「中国偽装漁民の尖閣上陸」による小競り合い、中国軍の上陸作戦による本格的戦闘、自衛隊の奪回作戦、米軍の参戦というシナリオに沿って、双方の作戦目標、使用兵器、戦闘の推移を論じています。

実際に尖閣問題で戦闘が起きたらどうなるかが良くわかる、興味深い内容です。そこで、石垣島を含む先島諸島に直接関わることを中心に、この本からいくつかをひろってご紹介したいと思います。以下『 』内はこの本からの引用、それ以外は私のコメントです。

戦闘全体の特徴、性格について

『東シナ海で戦いが行われるとすれば、近代的な長射程のミサイルを相互に撃ち合う戦いである。空でも、海上でも、海中から海上への戦いでも、人類が未だ経験したことがない、戦いになる。』(p.222)

なるほど、なぜいま宮古、石垣にミサイル部隊なのか、わかる気がします。防衛省・陸上自衛隊が配備しようとしている地対艦、地対空ミサイルは、この「人類が未だ経験したことがないミサイル戦」の重要な兵器になるのでしょう。

平時における緊張の激化

著者達は、尖閣諸島の領海及び接続海域への中国国家海警局の船舶の侵入と、海上保安庁の巡視船による対応という現状を踏まえて、今後を次のように予想しています。

『中国空軍は、自衛隊機の中国機への接近飛行や情報収集飛行に対して、緊急発進を行ない、警戒・監視の度を強め、海軍を中心に海警局船舶などと東シナ海において演習な

どを実施することで、日本に圧力を加えてくることが予想される。

これに対し、日本は海上保安庁が主体となって領海侵入に対処するとともに、海空自衛隊による警戒監視を強化していくことになるだろう。

そういう動きに伴い、日中ともに南西諸島地域での活動がますます活発化していき、次第に緊迫の度合いが高まることが考えられる。』(p.18)

海上保安庁、海警という警察力同士のにらみ合いが、中国軍と自衛隊の活動の活発化によって、次第に軍事力同士のにらみ合いに変わっていきます。そして、

『陸上自衛隊は(中略)、中国海兵隊の尖閣諸島占拠を防ぐため、同諸島に一個大隊規模、南西諸島の島嶼にはそれぞれの島に連隊規模の部隊を、事前に展開することも考えられる。

ただし、これらの兵力の展開は両国間の緊張を高め、特に尖閣諸島に日中いずれかが軍隊を配備した場合には、武力紛争に発展する可能性は大きいといえよう。』(p.27)

連隊規模と言えば、数百から千人程度の兵力でしょう。先島諸島に陸自部隊の配備が進めば、両国間の緊張はさらに高まり、武力紛争の可能性が強まります。そして、著者達は、漁民に変装した中国の民兵などが漁船で尖閣に近づき、上陸するシナリオを考えています。

中国偽装漁民の尖閣上陸

『尖閣に上陸した漁民などが、武器を保有するなど、その対応が海上保安庁の能力を超えると判断された場合には、日本国政府は、海上警備行動を発令し、海上自衛隊は海上保安庁と協同して中国漁船への対応を行う。

このような海上自衛隊艦艇等の活動に対し、中国海軍艦艇等は航行妨害等を実施し、南西諸島海域で偶発的な武力衝突が発生するなど、一気に緊迫の度が高まる可能性が高い。

尖閣周辺海域において、中国軍と自衛隊の対峙状態が生起し継続すると、一気に軍事的な小競り合い等衝突のエスカレーションラダーを駆け上がる可能性がある。』(p.31)

「偽装漁民の上陸」はひとつのあり得るケースですが、一般に、尖閣周辺海域で中国軍と自衛隊のにらみ合いが続くと、さまざまなきっかけで、一気に武力衝突に突き進む可能性が

あります。もめごとの火種を抱えた地域での軍事力は、戦争を防ぐ抑止力どころか、逆に「戦争突入力」になり得るのです。

『南西諸島にある利用可能な港湾・民間空港を、自衛隊機及び米軍機の離発着支援ができるように整備し、燃料・弾薬などを地下施設に備蓄して、艦艇・作戦機等の航空基地として活用する。』(p.33)

先島諸島の前線基地化です。南ぬ島石垣空港や石垣港は、このような基地に変わるでしょう。米軍機の使用は当然の前提と考えられています。

『陸上自衛隊は、(中略) 中国の侵攻部隊の尖閣諸島などへの接近を阻止するために、対艦ミサイル部隊を主要な島々に配備するとともに航空自衛隊と連携して、作戦地域の防空態勢を整備しておく。』(p.39)

陸自の地対艦ミサイル(射程約 200km)が、尖閣諸島に接近する艦艇を標的にしていることをはっきり述べています。

重要なのは、陸自ミサイル部隊の先島配備が、「偽装漁民の上陸」を待つまでもなく、現在既に実施されようとしていることです。私は、この配備自体が、「偽装漁民」にも劣らぬ緊張激化の要因になるのではないかと見ています。

著者達は、偽装漁民の排除あるいは保護をめぐる両国の衝突が、中国軍の尖閣上陸作戦という戦闘に発展することを想定しています。

本格的武力紛争、中国軍の尖閣上陸

『中国第二砲兵(戦略ロケット軍)は、南西諸島に所在する日本の基地・レーダー・地対空ミサイルなどの機能低下・能力喪失を狙いとして SRBM・MRBM・SLBM 等の弾道ミサイルなどを発射する。引き続き、中国空軍は揚陸艦及び輸送機などによる着上陸作戦を安全・容易に実施するために、戦闘機を随伴した爆撃機、戦闘爆撃機が、南西諸島に対する爆撃を実施する。そして、水上戦闘艦艇群による防御を得た上陸部隊の中国軍が、尖閣に上陸を開始する。』(p.43-44)

SRBM、MRBM、SLBMとは、それぞれ短距離、中距離、潜水艦発射の弾道ミサイルのことです。先島諸島に置かれる軍事施設は、本格的武力紛争が始まれば、ミサイルと爆撃機の攻撃にさらされることが想定されています。

『日本政府は、防衛出動待機命令を発令し、航空総隊隷下の戦闘機部隊を機動展開させる。(中略)民間機などへ紛争の被害が及ばないように飛行制限及び禁止空域を設定し、南西地域全域が自衛隊の作戦地域として指定される。』(p.45)

『政府は、武力攻撃事態対処法に基づき、防衛上の事態と認定、防衛出動を下令する。』(p.45)

こうして、先島は、ミサイルが飛び交い、民間機も飛べない、文字通りの戦場になります。

『自治体・警察・海上保安庁は、島民の避難・保護収容を実施し、自衛隊はこれを支援・護衛する。』(p.45)

国民保護法に基づく全島避難です。ミサイル着弾前に避難できなければ生命が危険にさらされ、無事避難できても、見慣れた景色、住まい、仕事の全てを失います。それにしても、10万人を超える先島の住民を、どのように輸送し、どこに保護収容するのでしょうか？実施主体と考えられている石垣市役所、八重山警察署、海上保安庁などは、具体的な避難計画を持っているのでしょうか？

『状況により、掃海母艦、潜水艦、航空機などにより、主要な海域に機雷を敷設するほか、主要な島々の沿岸部(上陸適地)に水際地雷などを埋設し、侵攻を阻止する。』(p.50)

石垣島の上陸適地とは名蔵湾や御神崎などでしょうか。沖合いには機雷が浮かび、浜辺は地雷原になります。

『中国からの弾道ミサイル攻撃は、北朝鮮に近い吉林省と台湾正面の福建省・浙江省の二方向から発射されるために、イージス艦を二正面に配備しなければならず、空中ですべてを撃破することは難しい。このため、日本のBMDを突破した弾道ミサイルや巡航ミサイル攻撃に対して、戦闘機による飛翔ミサイルの直接破壊及び基地防空火器、特に短SAMによる積極的な防衛と、在地にある戦闘機などの空中退避や人員退避、隠蔽掩蔽に

よる被害局限策と堅固な基地防御措置などの消極的な防衛の双方で対処する。』(p.52-54)

BMDとは弾道ミサイル防衛、短SAMとは短距離地对空ミサイルのことです。現在の陸自配備計画で導入予定の地对空ミサイルが大いに使われる場面です。しかし、軍事技術の粋を集めても、この「積極的防衛」だけで飛来する弾道ミサイルや巡航ミサイルを全て撃ち落とすのは難しく、戦闘機の空中退避などの「消極的防衛」も併用せざるを得ないようです。石垣市街地は、見る影もない変わり果てた姿になるでしょう。

『中国軍が尖閣諸島または先島諸島にまで上陸する場合には、海上自衛隊艦対艦ミサイル及び陸上配備の対艦ミサイルにより、中国海軍揚陸艦及びそれらを支援する艦艇を洋上で撃破する。損害が出てさらに島に向かってくる揚陸艦に対しては、対艦ミサイル・対戦車ミサイル・砲撃により、それらを撃破する。さらに上陸してくる海兵部隊には対戦車兵器などにより撃破し、上陸を阻止する。』(p.58)

宮古、石垣の陸自部隊は、破壊されずに残った地对艦ミサイルを使って、尖閣あるいは先島に上陸を図る中国軍艦艇を集中攻撃します。しかし、著者達は、作戦が完全には成功せず、中国軍の一部が尖閣に上陸する事態を想定しています。

日本の尖閣奪回

『中国軍の一部が尖閣に上陸した場合、その後、後続部隊を上陸させ、ヘリポート・飛行場・岸壁・トーチカ・ミサイルの配備等、急速にインフラの整備と戦力増強を図るなど、実効支配のための行動を実施するだろう。そして尖閣の領有を国内外に宣言するとともに、中国軍の有力な海空戦力を引き続き尖閣周辺海空域に展開し、事態を現状で固定化し占領を既成事実化することになる。』(p.61)

これに対して、

『日本は本州に残っていた戦力で、まず尖閣周辺地域の航空優勢、海上優勢を奪回・確保するための作戦を行い、中国の海空部隊を殲滅排除することに努める。』(p.61)

航空優勢、海上優勢は尖閣上陸に成功した中国軍がまずは握っていると想定されています。先島の自衛隊部隊も、取り残された、あるいは任務で残った住民も、事実上、本土と本島から切り離された状態に置かれているわけです。

『この段階では、日本の尖閣逆上陸作戦の可否が大きなポイントになる。そのためには、尖閣に上陸した中国部隊の陣地構築を含む戦力増強を、いかに阻害するかということと、わが国の逆上陸兵力を、いかに安全に尖閣に輸送できるかという点が重要になる。

(中略) 中国軍の底知れぬ人的抗堪(こうたん)性と、地理的縦深性及び自衛隊の限られた攻撃能力と兵力の量・燃料・弾薬・食料・補用物品などの補給量も勘案しなければならない。

従って、日本の兵力だけで尖閣を奪回する戦いはきわめて熾烈なものとなり、これに伴い多大の犠牲を生じる可能性が高いだろう。』(p.61-64)

この後にも、自衛隊による逆上陸作戦の記述は続きますが、著者達は、米軍の参戦なしには奪回は困難を極め、安定して確保することも難しいと見ているようです。

米軍参戦

『中国は、尖閣諸島を占拠するに当たり、極力米軍参加の回避に努める。従って、弾道ミサイル攻撃や巡航ミサイル攻撃に当たっては米軍基地を避け、世論戦・心理戦により、戦争を避ける方向に米国世論を誘導していく。

また、武力紛争の範囲を米軍基地がない先島に限定する。逆に日本にとっては、政治、外交などあらゆる手段を講じて、米軍が参戦するように誘導していくことが必要となる。』(p.71)

著者達は、結局米軍が参戦するというシナリオを描いていますが、そうだとした場合、中国側は米軍の役割を限定的にとどめるために、米軍基地への攻撃はなるべく控えるでしょう。また、日米側も嘉手納、普天間、ましてや横田や横須賀にミサイルが着弾する事態は避けたいので、双方とも、はじめから終わりまで戦闘範囲をほぼ先島に限定しようとするでしょう。これは、究極の「先島捨て石作戦」と言うほかありません。

その後は、中国の戦闘基盤そのものを攻撃目標とする米軍の機動打撃力と、自衛隊の尖閣上陸作戦によって、奪回に成功すると想定しています。

日本の尖閣確保及び維持

『中国軍の尖閣上陸部隊を撃破・排除し、自衛隊が確保した後、島には陸上自衛隊及び警察を常駐させるだろう。そのため、常駐化と尖閣防衛に必要な資器材の緊急輸送を行ない、また、島全体の不発弾等の安全処置を講じ恒久的施設を建設する。』(p.79)

『中国軍は日本(日米)の強力な反抗を受けて尖閣上陸部隊を撤収し、一旦東シナ海沿岸へと戦力を下げるであろう。

しかし、再度、尖閣及び日本打撃のための態勢立て直しを行い、次の作戦発動に備える。』(p.80)

尖閣諸島の支配を武力で確保しても、それで平和になるわけではありません。尖閣は要塞化され、双方は引き続き情報収集・警戒監視等の海上作戦、航空作戦を実施し、軍事的緊張は続きます。そして

『陸上自衛隊は、尖閣諸島・先島諸島に、中国軍との戦闘のための部隊の配備を継続することになる。本州などから抽出された部隊を補うために、本州部隊の再編制を実施するか、増強の部隊を編制して新たに配備する。』

戦闘で傷ついた石垣、宮古など先島諸島は、次の戦闘に備える最前線の軍事拠点として新たに再編・強化されます。島に元の生活が戻ることは、このシナリオからは読み取れません。

以上が、この本が描く尖閣武力紛争のあらましです。もちろん、これはひとつのシナリオであり、必ずこうなるというものではありません。しかし、領土をめぐる緊張の高まりが武力紛争に発展した時に何が起きるか、比較的冷静な分析と予想が示されていると思います。

みなさんは、どうお感じになったでしょうか。

私は、尖閣問題の武力解決という選択肢は、私にとってはあり得ない、と強く感じました。それは、どちらが勝とうと、石垣島での私の生活が根本的に失われることはほとんど避けられないと悟ったからです。

別の選択肢、陸上自衛隊ミサイル部隊の先島配備をやめさせ、平和的外交交渉によって領土問題を解決する道を、全力で追求したいと思います。